

かりやすか 荊安賀遺跡

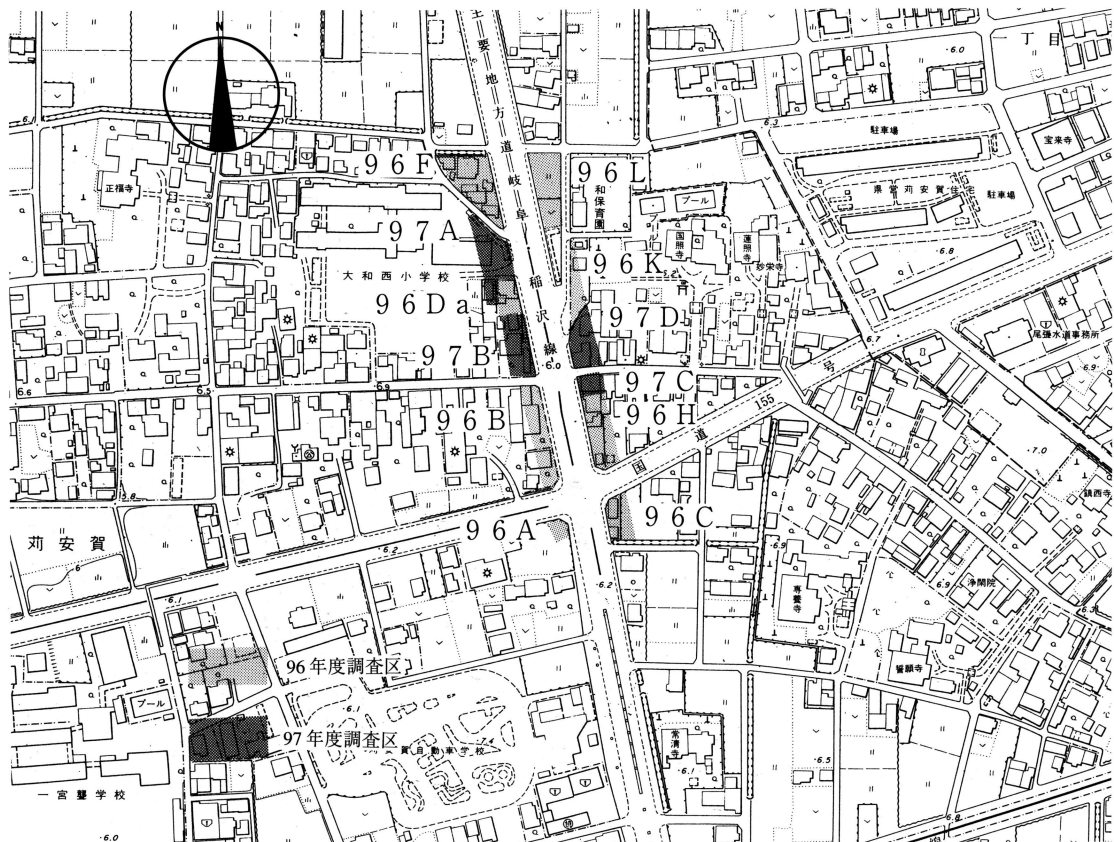
調査の経過 荊安賀遺跡は一宮市大和町荊安賀に所在し、北には八王子遺跡がある。遺跡周辺は民家が密集する住宅街となっており、地形の旧状を窺うことはできない。

発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として平成9年4月から10月にかけて実施されたものであり、調査面積は1,732㎡である。

調査は、西尾張中央道を挟んで、しかも平成8年度調査区の間を埋めるように設定された4調査区について実施した。その成果は、大勢として昨年度の成果を追認するかたちのものであったが、昨年度にも増して荊安賀城との関連が強まり、遺跡を理解する上で重要な方向性を提示することになった。

昨年度の調査において、遺構・遺物については大きくA（弥生）・B（古墳）・C（中世・戦国）・D（近世）の4期に区分することができた。今年度はそのうちA・B期が欠落し、また城下町期を設定できる可能性が強まったので、C期を中世、D期を城下町期とし、城下町期以後の近世をE期に改める。

C期 A・B・D区で東西方向の溝、C区で南北方向の溝を検出した。今年度新たに南北方向の溝を追加確認したことによって、方形区画の点在する可能性が強まった。しかし井戸の追加事例はなく、単純に集落の展開を想定するわけにはいかない。



第1図 調査区位置図（1：5000）

D 期

懸案であった荊安賀城関連の遺構として、A区では幅5m以上、深さ1.5m以上の大溝、C区でもほぼ同規模の大溝、D区では同時期の河川堆積層を検出した。また、B区では南北方向の溝と廃棄土坑や該期の遺物集中区域を検出した。B区の調査では、街道沿いに位置しているという想定のもと、街道関連の資料を得るべく努力したけれども、ついに確証をえることはできなかった。ただ、上述の集中区は町屋に関連する可能性もある。

A区の大溝は、同じ位置で掘削が継続されている。江戸時代には明らかに規模を縮小しており、心證寺に関連する区画溝と考えられるが、当初の規模はまさに「堀」であり、17世紀後半創建の心證寺を遡る時期の堀割りであった可能性が高い。荊安賀城の外郭に寺が配置されていたことを考慮すれば、この区画にその後忘れられてしまった「寺」が存在していた可能性は高い。

一方、C区の大溝については、ちょうど街道に平行していることから、虎口に関するものではないかと考えたが、どのようなプランを構成するのか明らかにはできなかった。

D区では炭化物や焼土の混じった堆積層を検出し、土器・陶器だけでなく、漆碗などの木製品が出土した。

E 期

近世関連は街道沿いのB・C・D区に集中していた。そのうち、川沿いであるC・D区では近世の整地層が厚く堆積してただけでなく、炭化物や焼土粒の充満した土坑が展開し、「鍛冶」との関連が考えられた。B区では多くの柱穴を検出したが、礎石をもつものともたないものがあり、それが屋根瓦の普及とどの程度関連しているのか明らかにすることが課題である。

(黒田哲生・浅井厚視・石黒立人)



97D区



97A区



97B区

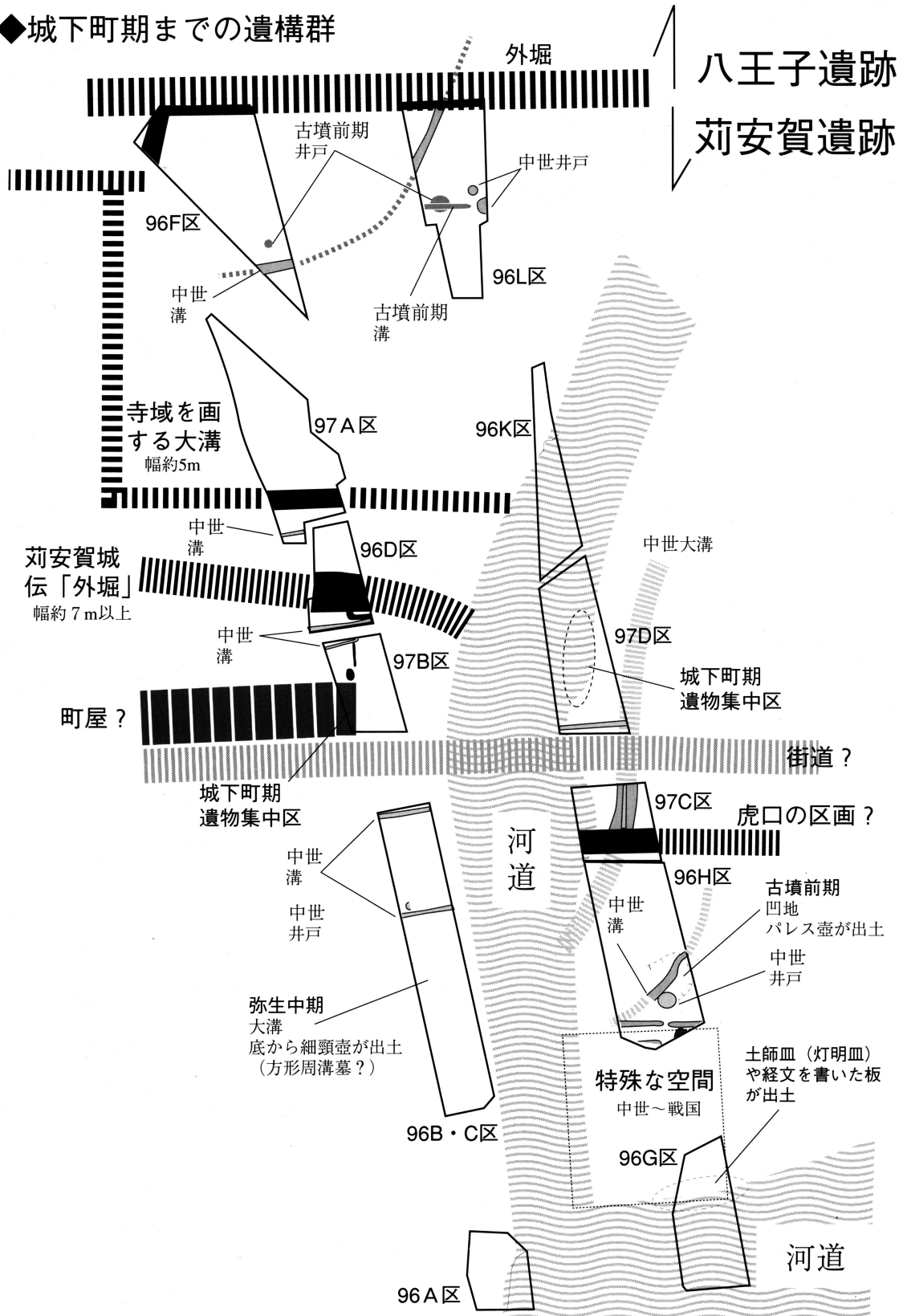


97C区

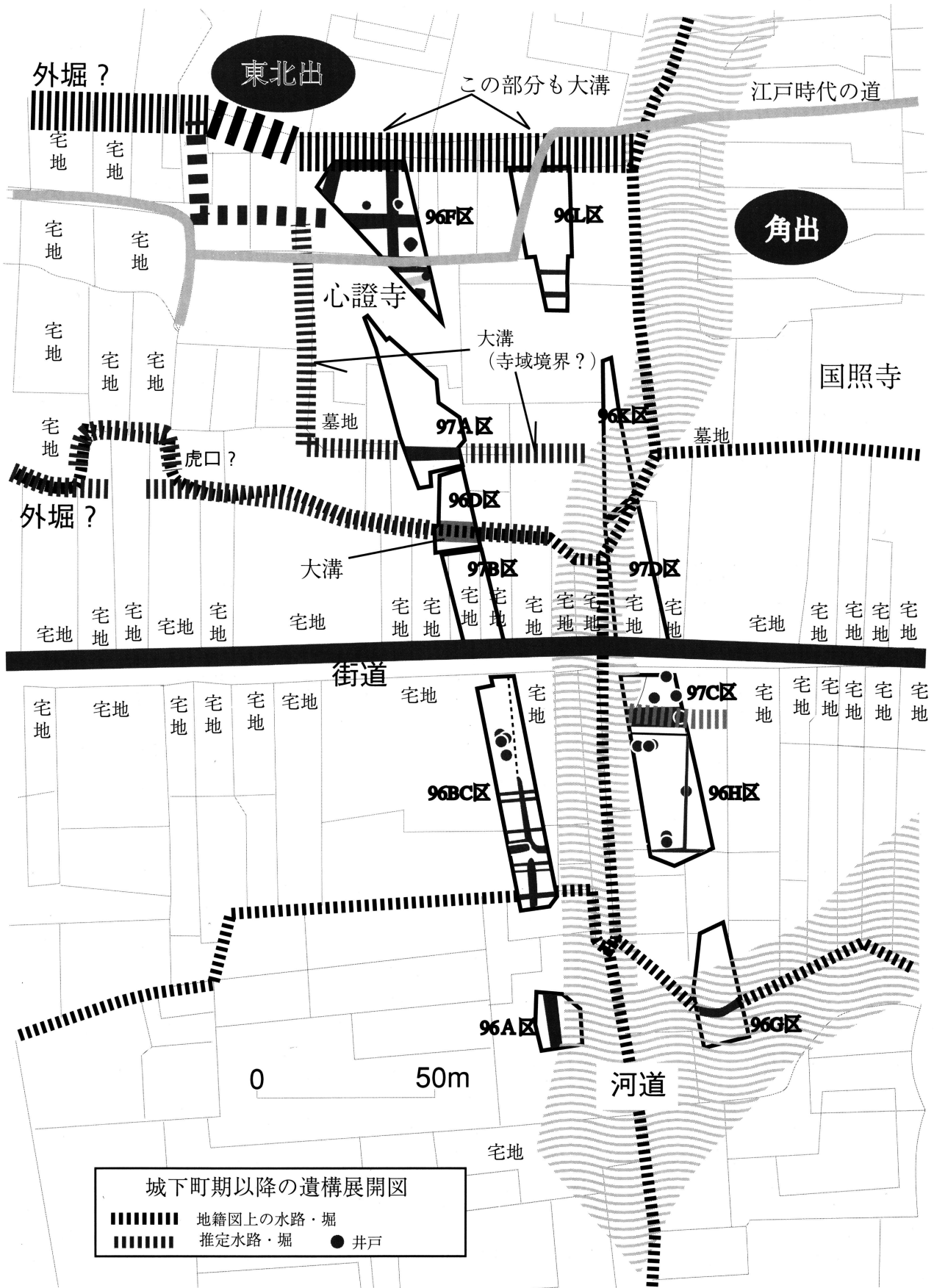


97D区

◆城下町期までの遺構群



第2図 遺構全体図



第3図 荻安賀遺跡周辺地籍合成図（明治24年地籍図より）